

宇野浩二『苦の世界』書誌的周辺

増田周子

宇野浩二は、大正八年四月一日発行の、「文章世界」に発表した「蔵の中」で世に出た。巧妙な語り口で、独自の世界を開拓したが、この作品に対する当時の文壇での評価は、のち、宇野浩二自身が「毀誉褒貶半半であった」（注1）と記しているが、拙稿「宇野浩二文学における同時代評」（注2）で明らかにしたように、「毀誉褒貶半半」というより、むしろ「毀」の批評の方が多かった。菊池寛が「何うして落語が何かのやうな形式を取らなければならないのか」（注3）と否定的に評価し、田中純「創作列評」（二）（注4）、細田源吉「一瞥した四月の作品」（注5）、中村星湖「四月の小説」（注6）等が、菊池寛の批評を踏襲した。だが、正宗白鳥が「空想も描写も粉々たる凡庸作家中に異彩を放つてゐる」（注7）と、「蔵の中」を絶賛し、宇野浩二は一躍新進作家と認められたのである。この正宗白鳥の月旦が、宇野浩二を文壇に大きく押し出す流れを作っ

た。そして、大正八年九月一日発行の「解放」に発表した文壇第二作目の「苦の世界」は、一転して、肯定的な評価が占める。すなわち、木蘇穀は、「我々が別に深く省みもしないで通り過ぎ勝ちな世界に対して斯く迄情味に満ちた詩を見出し得る人」（注8）といい、「表現はさうしたものにしつくり合つたフレッシュユそのものといつてもいいスタイルだ」と、菊池寛が否定的に「落語か何かのやうな」といったスタイルそのものを高く評価するのである。また、宮島新三郎も、「苦の世界」を「兎に角面白い」、「当代第一流のストーリー・テラーの名に恥ぢない」（注9）と評し、佐藤春夫も、「素人くさいところが一つもない。さうしてその自由自在な筆つきには、隅から隅まで用心が行き届き、一種鮮やかな手腕」（注10）だと、その才能を激賞したのであった。「苦の世界」は世評高く、宇野浩二の新進作家としての位置を確立した作品であるだけでなく、

宇野浩二の代表作である。しかし、「苦の世界」は、その成立について複雑なところがある。本稿では主に「苦の世界」の書誌的諸問題についてみていきたいと思う。

一、「苦の世界」初出発表について

『苦の世界』の初出発表について、渋谷駿は、『宇野浩二全集第1巻』（昭和43年7月25日発行、中央公論社）の「あとがき」で、次のように記している。

「その一」の初めの二節を、大正七年八月、『大学及大学生』に「二人の話」の題名で発表。つぎに、「その二」の五節をまとめて、初めて『苦の世界』の題名で、大正八年九月、『解放』に発表。「その二」は、『筋のない小説』の題名で、大正九年一月、『解放』に発表。「その三」は、『迷へる魂』の題名で、大正九年四月、『中央公論』に発表。「その四」は、『人の身の上』の題名で、大正九年七月、『雄弁』に発表。「その五」は、『ある年の瀬』の題名で、大正十年一月、『大観』に発表。「その六」は、著者の記憶では、「ことごとく作り話」という題名で、大正十年五月頃『週刊朝日』に発表したということだが、『週刊朝日』の前身である『旬刊朝日』が、大正十一年二月の

創刊なので、それに該当するものがなく、現在その掲載誌は不明。

渋谷駿が「著者の記憶」では、というのは、宇野浩二が、『苦の世界』（岩波文庫）（昭和27年2月25日発行、岩波書店）の「あとがき」で、「『その六』は、『ことごとく作り話』といふ題で、大正十年の、たしか、五月頃の『週刊朝日』に、発表した」と書いていることを指しているようだ。

この掲載誌が未詳であった「ことごとく作り話」の初出が判明したのは、ごく最近のことであって、石割透が「宇野浩二『苦の世界』」（絵を描かない画家）の物語」（『日本の文学』8）平成2年12月発行、有精堂出版）で、『雄弁』（大正9年9月1日発行）であることを指摘した。「ことごとく作り話」は、雑誌「雄弁」に発表されたときの題名は「作り話」である。では、なぜ宇野浩二の記憶には「週刊朝日」があったのだろうか。また、いつ「作り話」を「ことごとく作り話」と改めたのか。このことに関して、石割透は何も言及していない。どういう事情によるのであろうか。正確なことはよくわからないが、この「作り話」は、のち「悉く作り話」と改題・改稿されて、昭和二年六月十九日発行の、『週刊朝日』に、再掲載されたのであった。宇野浩二には、この時の「週刊朝日」が記憶にあったのであろう。「苦の世界」は、宇野浩二の代表作であるにも

かわらず、ごく最近まで、その初出さえが判明しなかったというところがあった。このことは芥川龍之介文学研究などに比べると、宇野浩二文学研究がいかに立ち遅れているかを示している。

現行『苦の世界』を、その構成順に、初出雑誌名、発行年月日等の書誌的なことを、先ず、最初にまとめておく。*印は注記である。初出末尾に付されている作者の付記など、『苦の世界』の単行本や全集ではすべて省かれているので、ここでそれらをあげておく。

①『苦の世界』（解放）大正8年9月1日発行、第1巻4号、11頁（68頁）

*「一、私といふ人間」「二、浮世風呂」「三、難儀な生活」「四、無為の人々」「五、をんなの始末」「六、嘗ては子供であつた人々」の六節から成る。現行『苦の世界』の「その一」の部分である。本文のあとに一行あけて、次のように宇野浩二は記している。

それから、三人は花屋敷に行つて、如何に面白くメリイ・ゴオ・ラウンドに乗つて長い時間を遊び暮したか、如何に泉水に生捕られてゐる頬が面白いと言つて、時の移るのを忘れて鱈をやり過して、看守に叱られたか、如何に「桃から生れた桃太郎」の唱歌に聞き惚れて、三人が果は泣き出したか、如何にをんなが突然帰つて来たか、如何に又別のヒステリイの女子が現れたか、そしてそれから、そしてそれから……仲々この話は男女の

仲が話題となつてゐるだけに、連綿と尽きないのである。だが、これだけの話でさへ、「下手の長談義」なる話手には、終になつて行く程面白くなつたやうな次第であるから、こゝで一先未定稿として、「読切」としておく。

②「筋のない小説―続『苦の世界』―」（解放）大正9年1月1日発行、第2巻1号、26頁（60頁）

*「一、憐れな老人等」「二、花屋敷にて」「三、私の伯父の一生」の三節から成る。現行『苦の世界』の「その二」の前半部分である。

③「筋のない小説『接前』―続『苦の世界』―」（解放）大正9年2月1日発行、第2巻2号、61頁（90頁）

*「四、浮世の二人男」「五、輪廻の世界」の節から成る。その末尾に次のような作者付記がある。

親愛なる読者諸君ノ紳士及淑女ノ作者はこゝに再び諸君に向つてお詫ししなければならない。「苦の世界」のこと、書いても書いても尽きないのは、諸君も先刻お察しのことであらう。作者としては、これで、つひ無駄なことを喋り過ぎてゐながら、時々ふつと余り話が長くなるのに気がついて、言ひたいこと、話したいことを随分切り捨て、ゐるのである。それ等の切り捨て方が、話した方よりもつと筋立つたことであるかも知れない

かつたと思へる程、切り捨て、ゐるのである。とはいふもの、又書いたことを消して、切り捨てた話を入れようなどといふのも、もう作者には少し面倒になつて来た。そしてまだこの話が纏まりもなく、終らないことを作者は、小説家としての手際のないことに、恥ぢ入る次第である。

この物語は、日本流の言葉で言ふと、輪廻の世界で、西洋流に、アンドレエフといふ男の言葉を借りると、車の輪の廻るやうな永遠の世界なのである。だが、そんな言葉を無暗に連発していると、首筋の辺がむづ／＼して来るが、兎に角私は約束しよう、もう一度続篇をつゞけて書けば、何とか小説らしくきまりがつきさうに思ふ。又浪花節の切口上ではないが、鶴丸のその後は如何、山本のその後は如何、里見の女房の芸者は、話手梅野のその後は、そしてをんなは、問題の中心である彼女が又如何に屢々梅野を悩ますか、彼は下宿を出て何処に行つたか……多分作者はこの後篇をつゞけて書くつもりではあるが、これは又これとして、読切としておかう。

(一月十八日。以上を校正するに當つて一筆——この稿は一月号のとは合はして一篇の小説を成す作者の意図であつた。ところが、題名の「筋のない小説」といふのが災をなしたのか、全部昨年の十一月に完成して、大鑑閣に送つてあつたにも拘らず、

一月号の雑誌編輯の都合上、切断されたものである。作者と及び彼の作「筋のない小説」のために一言弁解しておく)

なお、この部分は現行『苦の世界』の「その二」の後半部分にあたる。

④「迷へる魂」(「中央公論」大正9年4月1日発行、第35巻4号、247―238頁)

*「一、発端」「二、発端の続」「三、津田沼行き」「四、うき草や……」の四節から成る。本文の終りに一行あけて、「又しても『苦の世界』である、だから、これから未だつゞくのである。」という付記がついている。なお、同誌の奥付けに「大正九年二月一日発行」とあるのは誤植である。現行『苦の世界』の「その三」の部分である。

⑤「人の身の上」(「雄弁」大正9年7月1日発行、第11巻7号、374―338頁)

*「はしがき」「一、半田六郎」「二、桂庵にて」の三節から成る。現行『苦の世界』の「その四」の部分である。

⑥「ある年の瀬」(「大観」大正10年1月1日発行、第4巻1号、313―332頁)

*「二」「四」からなる。末尾に、「『苦の世界』の内、九・十(二・六)」と脱稿年月日が記されている。現行『苦の世界』の

「その五」の部分である。

⑦「作り話」〔雄弁〕大正9年9月1日発行、第11巻9号、335～353頁

*末尾に「——『人の身の上』の中——（・九八）とあり、「九八」は、脱稿年月大正九年八月を示すのであろうか。現行『苦の世界』の「その六」の部分である。

この「作り話」は、「悉く作り話」と改題されて、「週刊朝日」（昭和2年6月19日発行、第11巻28号、14～17頁）に再掲された。

二、「二人の話」と現行『苦の世界』の「その一」との

関係について

宇野浩二は、「苦の世界」を「解放」（大正8年9月1日発行）に発表する一年程前に、「二人の話」を「大学及大学生」（大正7年8月1日発行）に発表している。

この「二人の話」は、現行『苦の世界』の「その一」の部分の、「一、私といふ人間」と「二、浮世風呂」の個所にあたる。「解放」の「苦の世界」は、この「二人の話」の部分に、「三、難儀な生活」から「六、嘗ては子供であつた人々」までを書き加えて発表されたのである。

宇野浩二は、のち、この「二人の話」について、「私の小説道——の一篇を旧き文学と生活の友・広津和郎に——」（新潮）昭和2年1月1日発行）の中で、次のように述べている。

私は彼（秋庭俊彦）の好意で、「二人の話」といふ二十五枚の小説を、彼の雑誌に載せてもらった。渡す時、彼に「小品のつもりだったが、小説になつたもんだから、二十五枚になつたんだが、話が二つに割れてるのが一寸失敗だが、さう悪いものではないつもりだ。二人の話なんて、「何々の話」といふ題の多い今時、気がひけるが、全く二人の男の話に違ひないし、今いゝ題が思ひつかないんだ」と私はいつた。

「二人の話」は、「苦の世界」のように、「一、私といふ人間」「二、浮世風呂」という形式に、章分けはされていない。構成のうえにおいて明らかにわかるように区分されていない。だが、内容において、「二人の話」は、宇野浩二が「話が二つに割れてある」「全く二人の男の話」というように、あくまでも貧乏な上に、ヒステリイのをんなに悩まされる「私」という「無名な絵師」である男の話と、酒に泥酔して、首縊りを加勢する男との、「二人の男の話」が中心である。「私」と、首縊りを加勢する「男」とが、どちらも同じ比重を持って、並列的に描かれている。「二人の話」は「苦の世界」の「その一」の部分の全体の五分の二にあたる。「二人の話」

が「苦の世界」と改題された時、「二人の話」はその章題にも採用

されている。

されない。「一、私といふ人間」と「二、浮世風呂」という章題で象徴されるように、「二人」でなく「私」に力点が移行するのである。そして、「五、をんなの始末」という章題が書き加えられるように「苦の世界」では、ヒステリーのをんなの占める役割が大きくなる。「二人の話」では、「私」と首縊り自殺を加勢した男との二人を描こうとしていたが、「苦の世界」では、をんなを中心に、「私」と「私」を取り巻く人物を書く、という形に変化していく。「二、浮世風呂」に登場する首縊り自殺を加勢した男は、「私」の周囲の人々の中で、苦悩の日々を送っている人間の、一挿話として扱われているのである。同様に、「三、難儀な生活」では、「私」の勤務している本屋の主人の山本が、彼の母のヒステリーに苦しめられている様を、「四、無為の人々」では、「私」が勤めていた本屋のすぐ近くの宿屋にいた鶴丸という法学生の怠惰な生活ぶり、彼の苦悩の日々の始まりの由来などを、「五、をんなの始末」では、「私」が、公周旋業者の里見に依頼して、「私」と暮らしていたヒステリーのをんなを、うまくごまかして、芸者にさせようとする話を、「六、嘗ては子供であつた人々」では、をんなが、芸者家にいくのを見送った「私」と山本が、鶴丸の下宿に集まり、やつれた顔を寄せあつてゐた。というように、それぞれさまざまな人々の「苦の世界」が描

かれてゐる。苦の世界」という言葉は、「二人の話」では出てこないが、「苦

の世界」と改題、改稿したとき、「二、浮世風呂」のなかで、すなわち、「私」と「首縊りを加勢する男」の二人が、料理屋で酒を飲む場面、男が「酒をつけてくれ。やつぱし酒、酒／＼……」と、でしのがんせ苦の世界つてね……」という具合に出てくる。また、さきに述べたように、「二人の話」では章題もない。「苦の世界」の作品世界の特色である、戯作風なスタイル、例えば、「一、私といふ人間」の章題横に、「ヒステリーの女子に悩まされる、こと／町の楽隊に向つて心に叫ぶこと」と、その内容要旨を個条書きするようなスタイルが、まだ「二人の話」では成立していなかった。この章題に続いて、「一のこと」という文で、二つの内容を簡単に表す体裁をとったことは、西鶴の、『日本永代蔵』の巻の「目録」に、例えば、

初午は乗つて来る仕合

江戸にかくれなき俄分限

泉州水間寺利生の銭

とある形態を模したものと考えられる。「二、浮世風呂」というタイトルも、戯作者式亭三馬の「浮世風呂」を、すぐに連想させる。さきの、「さ、でしのがんせ苦の世界」も、「月夜がらす」という江

戸末期の小唄からとつたものであり、「さ」は酒のことで、「酒で、
寝がせ苦の世界じゃえ」ともいう。宇野浩二の近世文学に対する
傾倒ぶりがうかがえる。「二人の話」から「苦の世界」(「解放」)へ
の変貌は、作品世界へのスタイルの確立でもあった。

では、「二人の話」と「解放」に発表された「苦の世界」(現行の
「その一」)、すなわち「一、私といふ人間」「二、浮世風呂」の部分
とは、その本文テキストにおいて、どのような関係にあるであらう
か、その異同についてみてみたい、と思う。

「二人の話」(「大学及大学生」大正7年8月1日発行)は、次の
書き出しではじまっている。

私たちは——母とをんな(妻と呼ぶよりも少くとも私にだけ
は、斯う云ふ方がよく感じが出るので)と、そして私とは——
暑い八月の日々を、郊外のある家の、六畳の座敷一室を借り
て暮してゐた。

これが、「苦の世界」(「解放」大正8年9月1日発行)では、次
のようになっている。

その頃、かれこれ一年近くの間、私たち、私の母と私のをんな
(妻と呼ぶよりも、少くとも私にだけは、斯う言ふ方がよく
感じが出るのだ。)とそして私とは、東京府下渋谷町の、或竹
屋の奥の六畳の座敷を、間借して住んでゐたのであつた。

このあと、「二人の話」では、をんなは、「その前の年の秋二ヶ月
ばかりの間、三十里ほど離れた或る地方の町で、芸者に出てゐたの
であつた。」と書かれていて、さきに、芸者時代のをんなと「私」
の交流が描かれる。一方、「苦の世界」では、このあと、「をんな」・
「私」・「母」の三人の間借生活ぶりが丁寧に説明される。そして、
をんなの芸者時代は、「さて——元来私のをんなといふ者は」とい
う言葉を用いて、「私」が回想するという形で描写されるのである。
すなわち、最初の書き出しの順序は、完全に「二人の話」と「苦の
世界」では逆の形をとっている。このように、構成上では、違いが
みられるが、その内容においてでは、「二人の話」と「苦の世界」
の「その一」は、大きな変化はない。だが、詳細に検討すると、本
文はかなり加筆されている。原稿用紙にして、約十五枚分が増加し
ている。ここでは、「をんな」を「彼女」に、「矢張り」を「やつぱ
し」に、あるいは、句読点の異同や語句の改変などの修辭上の訂正
や表現の技巧上の問題をとり扱わないことにする。内容のうえで重
要と思われる異同箇所についてのみ問題にしたい。

「二人の話」から「苦の世界」への本文異同で、「郊外のある
家」となっていた下宿場所を、「東京府下渋谷町の、或竹屋」とす
るなど、全体的に具体的、かつ丁寧に描写されていることが分る。
一目瞭然なのは、をんなの記述が増えていることである。をんなの

ヒステリイが、どんどんエスカレートしていき、「私」の本業である絵をかくことさえ出来なくなっていく様が、手にとるように感じられる。これは、「二人の話」では、あくまで、「私」と首縊りを加勢した「男」の二人を書こうという意識であつたのに対し、「苦の世界」では、をんなを中心に、「私」をとりまく人物の「苦の世界」を描こうとした。そして、のちに「をんなの始末」の伏線となるように、宇野浩二が思い図つたからではないか。これほど、突発的なヒステリー¹の発作を度々起こすようでは、「をんな」を「始末」する理由も、読者に理解できるであろう。

また、「二人の話」では、風呂屋で出会う男の話に移行する前に、次のような記述がみられる。

その中に私は電車の停留所に来てしまつた。——こんな風にだら／＼と取り止めもない話をつゞけて来て、私は一体何を話すつもりだつたらう。さうだ、あの話だつた、あのお湯屋で会つた男の話だつた。して見ると、今迄の私の話は前置きでも何でもない、ほんの無駄話、愚痴話だつた。許してくれ給へ。

この言葉の「無駄話」「愚痴話」という言い方にも、江戸時代の滑稽本の影響が感じられる。式亭三馬の『浮世床』は、「髪結いの順番を待つ各種の人びとの無駄話しを書き並べて庶民の日常生活の雰囲気」(注11)を出したものであるらしいが、宇野浩二も、かな

り近世戯作文学を意識していたらしい。また、「二人の話」では、「こんな風に話してゐたら、未だ未だ肝心のところへ行かない。早く終りに急がう。」とある。さきの「二、浮世風呂」へ移行する時の、前置きの文とともに、かなり読者を考慮した書きぶりである。戯作文学では、「読者見物の好みに合わせるため、往々にして読者見物の協力を頭から予想してかからねばならぬ」(注12)のために、「趣向」という方法をとるそう²だ。宇野浩二のこうした、読者を意識した態度は、戯作文学を受容したものといえるであろう。

しかし、「二人の話」から「苦の世界」に改変するとき、このような読者に媚びるような表現は、かなり省かれている。これは「二人の話」と「苦の世界」の中間に書かれた「蔵の中」(「文章世界」大正8年4月1日発行)について、田中純が「余り必要でもないことをうんと沢山書きこんで、読者をば／＼く／＼たり欠伸をさせたりして、それを傍から見ても楽しもうとして居るやうな人の悪さが見える。」(注4)と評したことや、菊池寛が「此の題材を扱ふのに、何うして落語か何かのやうな形式を取らなければならないのか、もう少し真面目な筆致で書いても充分ユーモアは、出ると思ふ」(注3)と諍ったことを考えに入れたのではないか。「蔵の中」によって、文壇デヴューは果したものの、第二作目の「苦の世界」は、宇野浩二の作家としての力量の有無を定める大切な作品であつた。こうし

た、評論家の悪評は、宇野浩二が、「苦の世界」を発表するにあたって、かなり慎重にさせたのであろう。

三、単行本『苦の世界』について

大正八年九月から大正十年一月にかけて、雑誌に発表された「苦の世界」が、現在の構成に纏められるのは、初出発表から二十八年も経過した戦後になってからである。「苦の世界」は単行本によって、その構成に変化があるので、大正期の初収から現在に至るまでの「苦の世界」の単行本、及び文学全集収録本について、発行年月日順に、次にあげることにする。*印は注記である。収録作品名は、「苦の世界」のみをあげ、他の収録作品名は省く。ここで問題にしたいのは、「苦の世界」のどの章が含まれているかである。§印には、「苦の世界」の章名を記しておく。

④『苦の世界』（大正9年5月20日発行、聚英閣）

§苦の世界その一／私といふ人間／浮世風呂／三、難儀な生活／四、無為の人々／五、をんなの始末／六、嘗ては子供であつた人々／苦の世界その二／一、哀れな老人等／二、花屋敷にて／三、私の伯父の一生／四、浮世の二人男／五、流転世界

*この本には、『巻頭小説』として、「苦の世界」の前に「あの頃

の事」が収録され、「苦の世界」の扉には、「（第一部）」とある。

⑤『迷へる魂』（大正10年11月20日発行、金星堂）

§迷へる魂／其一、津田沼行／其二、人の身の上／其三、或る年の瀬／其四、悉く作り話／其五、人心

◎『苦の世界』（代表的名作選集44）（大正15年9月26日発行、新潮社）

§解題（編者識）／苦の世界／一、私といふ人間／二、浮世風呂／三、難儀な生活／四、無為の人々／五、をんなの始末／六、嘗ては子供であつた人々

*「解題」には、「苦の世界」は、大正八年九月「解放」誌上に発表せるもの。「蔵の中」は、大正八年四月「文章世界」に発表せるもので、これは作者の第一作である。二作共にその特色を最も鮮かに示すことによつて、作者をして、一躍文壇に名をなした傑作であり、某批評家の如き、新しき西鶴の出現として、此等の作を迎へた。苦勞人風の世味人情味は、独得の巧妙なる話術と相待つて、当時の文壇に驚く可き新風と目されたものである。／編者識」とある。また、同書収録の「苦の世界」の末尾に、次の作者付記がある。

（作者いふ。「苦の世界」はこの題で、大正七年八月号の雑誌「解放」に発表したものであります。これだけの説切のものと

あります。しかし、その後大正八年につづいて別の題で、その頃の雑誌「中央公論」、「改造」等に、この物語の続篇に相当するものを、この作の二倍程発表して、後「苦の世界」第一部、第二部、(その他)として別に単行本に出したことがあります。その意味で、これは「苦の世界」の「第一部」だけではありません。ここで、宇野浩二が大正七年八月号というのは誤りで、大正八年九月号が正しい。また、「その頃の雑誌」中央公論「改造」等」というのは、「中央公論」「解放」等の記憶違いである。

④『広津和郎・葛西善蔵・宇野浩二集』(現代日本文学全集48)』

(昭和4年11月10日発行、改造社)

§苦の世界(前篇) へ一、私といふ人間／二、浮世風呂／三、難儀な生活／四、無為の人々／五、をんなの始末／苦の世界(後篇) へ一、哀れな老人等／二、花屋敷にて／三、私の伯父の一生／四、浮世の二人男／五、流転世界

⑤『苦の世界』(改造文庫・第2部193)』(昭和7年11月11日発行、改造社)

§苦の世界その一 へ一、私といふ人間／二、浮世風呂／三、難儀な生活／四、無為の人々／五、をんなの始末／苦の世界その二 へ一、哀れな老人達／二、花屋敷にて／三、私の伯父の一生／四、浮世の二人男／五、流転世界／苦の世界その三 へ一、さ迷へる

魂その一／二、さ迷へる魂その二／三、津田沼行その一／四、津田沼行その二／苦の世界その四 へ一、人の身の上その一／二、人の身の上その二

⑥『苦の世界』(文芸春秋選書25)』(昭和24年12月23日発行、文芸春秋新社)

§苦の世界その一 へ一、私といふ人間／二、浮世風呂／三、難儀な生活／四、無為の人びと／五、をんなの始末／苦の世界その二 へ一、あはれな老人達／二、花屋敷にて／三、私の伯父の一生／四、浮世の二人男／五、流転世界／苦の世界その三 へ一、さ迷へる魂／二、さ迷へる魂／三、津田沼行その一／四、津田沼行その二／苦の世界その四 へ一、人の身の上その一／二、人の身の上その二／苦の世界その五 へ一、ある年の瀬その一／二、ある年の瀬その二／三、ある年の瀬その三／四、ある年の瀬その四／苦の世界その六 へ一、ことごとく作り話その一／二、ことごとく作り話その二

⑦『広津和郎・葛西善蔵・宇野浩二集』(現代日本小説大系33)』(昭和25年7月10日発行、河出書房)

§苦の世界その一 へ一、私といふ人間／二、浮世風呂／三、難儀な生活／四、無為の人びと／五、をんなの始末／苦の世界その二 へ一、あはれな老人たち／二、花屋敷にて／三、私の伯父の一生

／四、浮世の二人男／五、流転世界

④『苦の世界〈岩波文庫〉』（昭和27年2月25日発行、岩波書店）

§苦の世界その一（一、私といふ人間／二、浮世風呂／三、難儀な生活／四、無為の人びと／五、をんなの始末）／苦の世界その二（一、あはれな老人たち／二、花屋敷にて／三、私の伯父の一生／四、浮世の二人男／五、流転世界）／苦の世界その三（一、さ迷へる魂その一／二、さ迷へる魂その二／三、津田沼行その一／四、津田沼行その二）／苦の世界その四（一、人の身の上その一／二、人の身の上その二）／苦の世界その五（一、ある年の瀬その一／二、ある年の瀬その二／三、ある年の瀬その三／四、ある年の瀬その四）／苦の世界その六（一、ことごとく作り話その一／二、ことごとく作り話その二）

①『広津和郎・宇野浩二集〈日本現代文学全集58〉』（昭和39年4月19日発行、講談社）

§苦の世界（前篇）（一、私といふ人間／二、浮世風呂／三、難儀な生活／四、無為の人々／五、をんなの始末）／苦の世界（後篇）（一、哀れな老人等／二、花屋敷にて／三、私の伯父の一生／四、浮世の二人男／五、流転世界）

①『宇野浩二全集第1巻』（昭和43年7月25日発行、中央公論社）

§苦の世界その一（一、私といふ人間／二、浮世風呂／三、難儀な

生活／四、無為の人びと／五、をんなの始末）／苦の世界その二（一、あはれな老人たち／二、花屋敷にて／三、私の伯父の一生／四、浮世の二人男／五、流転世界）／苦の世界その三（一、さ迷へる魂その一／二、さ迷へる魂その二／三、津田沼行その一／四、津田沼行その二）／苦の世界その四（一、人の身の上その一／二、人の身の上その二）／苦の世界その五（一、ある年の瀬その一／二、ある年の瀬その二／三、ある年の瀬その三／四、ある年の瀬その四）／苦の世界その六（一、ことごとく作り話その一／二、ことごとく作り話その二）

⑤『広津和郎・宇野浩二・葛西善蔵集〈日本近代文学大系40〉』（昭和45年7月10日発行、角川書店）

§苦の世界その一（一、私といふ人間／浮世風呂／三、難儀な生活／四、無為の人々／五、をんなの始末／六、嘗ては子供であつた人々）／苦の世界その二（一、哀れな老人等／二、花屋敷にて／三、私の伯父の一生）

これら単行本における『苦の世界』の本文テキストと雑誌初出との関係において、注目されることは、章題の変更、伏字の問題、登場人物の名前がなおされていることなどであろう。

まず、章題についてみる。章題が変わっているところが七箇所

ある。

一、初出「苦の世界」(「解放」大正8年9月1日発行)では、「五、をんなの始末」が単行本では、「をんな」の横の傍点が省かれたり、あるいは、つけられたりした。それを表にしてみると、次のようである。④・⑤は前記単行本を示す。

⑤・⑥・⑦・⑧・⑨・⑩	初出④・⑤・⑥・⑦・⑧・⑨・⑩
五、をんなの始末	五、をんなの始末

二、初出「筋のない小説―続『苦の世界』―」(「解放」大正9年1月1日発行)では、「一、憐れな老人等」とあったのが、単行本では「一、哀れな老人等」「二、哀れな老人達」「三、あはれな老人達」「二、あはれな老人たち」と漢字表記が四通りの変化をしている。それらは、次の通りである。

初出	④・⑤・⑥・⑦・⑧	⑨	⑩	⑪・⑫・⑬
一、憐れな老人等	一、哀れな老人等	一、哀れな老人達	一、あはれな老人達	一、あはれな老人たち

三、初出「筋のない小説(接前)―続『苦の世界』―」(「解放」大正9年2月1日発行)では、「五、輪廻の世界」であったのが単行本では「五、流転世界」に変更され、それが現行の『苦の世界』ま

で踏襲されている。

四、初出雑誌及び単行本④・⑤においては、「五、をんなの始末」と「六、嘗ては子供であつた人々」の二つの章に分かれていたが、⑥「現代日本文学全集48」(昭和4年11月10日発行)以後、「六、嘗ては子供であつた人々」の章題を省き、この二つの章を、「五、をんなの始末」の一つにまとめてしまった。

五、初出「迷へる魂」(「中央公論」大正9年4月1日発行)には「二、発端」「三、発端の続」「三、津田沼行き」「四、『うき草や…』」とあったのを、単行本では、次のように変えている。

初出	⑥『迷へる魂』	⑦・⑧・⑨・⑩
一、発端	其一、津田沼行	一、さ迷へる魂その一
二、発端の続	一、	二、さ迷へる魂その二
三、津田沼行き	二、	三、津田沼行その一
四、『うき草や…』	三、	四、津田沼行その二
	四、	

六、初出「人の身の上」(「雄弁」大正9年7月1日発行)は、「はしがき」「一、半田六郎」「二、桂庵にて」で構成されていた。単行本では、「はしがき」が削除されて、次の表のようになった。

48頁6～12行)

それが、④『苦の世界』では、次のように改められている。

その私の相手の女といふのは、その家のお上の妹であつた。その頃は、それ等の家々では、私のみならず、客が上ると、○○○新聞紙を於いて、それに客の下駄をのせ、客の着物はくるく〜と帯で巻いて、同じく○○○置くのが例であつた。始めて上つた者には、女がさうしてから、さて押入を開けて、その下の板を一枚外して見せながら、「あなた、○○○○○があつたら、下駄と着物を持つて、こゝへ入つて下さいね。そこから一間ほど這つて行つたら裏口の路次に出られますから……いゝえ、板張りですけれど、毎日一度づゝ、雑巾掛けをするんですから、汚くなんかありませんよ。」と言つて、初心の者を驚かしたものであつた。それが私くらゐになると、さうして自分の下駄と、帯で巻いた着物を○○○置いて、○○○寝るといふことが、何とも言へぬ、泥棒になつたやうな興味が湧くのだった。ところが、或日二階に三人連の客が上つて、⑤『苦の世界』28頁7行〜28頁3行)

さらに、この若干残された伏字が、その後、昭和四年の⑥『現代日本文学全集48』では、すべて埋められたのである。さきの残された伏字個所を順番にあげてみると、「部屋の隅に」「部屋の隅に」

「もしもの事」「部屋の隅に」となっている。そして、最後の「○○○寝るといふ」は、「寝るといふ」と、二字分の伏字個所がとられている。

この長文の伏字個所は、主人公「私」が「今から六七年前に、いやもう八九年前」に通いつめた銘酒を飲ませることを看板にして私娼をおいていた「銘酒屋」での出来事を描いているところである。現在「私」は、「二十八歳」であるから、「八九年前」といふと、ちょうど二十歳頃ということである。銘酒屋の「お上」の妹の元へ、ほぼ毎日行くのだが、ふとしたことで、姉の「お上」とも関係を持つてしまう、という「私」の悪夢のような浅ましい話を説明している。

宇野浩二は、エッセイ「蒲団の中」(『女性』大正13年5月1日発行)で、出世作「蔵の中」について、その題名を決定する前は、「蒲団の中」という題であつたが、「内容に幾分風紀に触れさうな疑ひのある点があつたので、原稿の下検閲を内務省に乞うたところが、一二個所伏せ字にするところと、表題が少し穏当でないからといふ注意」があつたので、「蔵の中」という題名に改めたと述べている。この、大正八年、九年は、かなり検閲を意識したのであろう。思想上の問題でなく、風俗壊乱の取り締りを危惧して、作者か、雑誌編集者が伏せ字にしたのであろう。

最後に、登場人物の名前の変更についてである。

初出「人の身の上」(「雄弁」大正9年7月1日発行)では、桂庵の里見が途中から、急に吉田になっている。初出「作り話」と⑧『迷へる魂』では、「黒柳」から「田原」に、「烏丸」から「松平」に人名を変えている。この章だけに登場する人物であるので、「黒柳」でも、「田原」でもよく、また「烏丸」でも、「松平」でもよい。あえて変更する必然性があまりわからない。モデルとの関係からであろうか。この他にも、名前の変更については、⑨『迷へる魂』の「其一、津田沼行」「其二、人の身の上」を、昭和七年版⑩『苦の世界』にくみ入れたときに、主人公「私」の名前は、「梅野」から「住友」へ変わった。結局⑪『苦の世界』は、その一は、「梅野」であるが、その二の終わりから「住友」に変わり、その三、その四は、「住友」になっている。

初出雑誌発表表から単行本にする過程で、異同の特記すべき点を指摘してきたが、それ以外に本文では「大して決して」を「決して決して」や、「おッ」を「おッとノ」などの表記上の改稿も多数みられるが、内容を変える程の書き換えはない。また、初出につけ加えられた、「後書」や「はしがき」は、単行本では全て省かれた。

四、中篇『苦の世界』から長篇『苦の世界』へ

長篇小説「苦の世界」を考える場合、この作品が、現行のような形態で成立する以前に、中篇『苦の世界』と、それとは別の書名の、『迷へる魂』(大正10年11月20日発行、金星堂)が存在したことに注目してよいであろう。この『迷へる魂』は、「其一」から「其五」までで構成されている。それが、のち、「其五」の部分だけを省き、長篇『苦の世界』の「その三」から「その六」までに編入されたのである。宇野浩二が『迷へる魂』執筆当初において、『迷へる魂』は、『苦の世界』と独立した作品として、構想していたのであろうか、それとも、あくまでも『苦の世界』の物語として執筆したのであろうか。そこで『迷へる魂』の初出について見てみたい。

単行本『迷へる魂』の「其一」の部分にあたるところの、初出『迷へる魂』(「中央公論」大正9年4月1日発行)には、単行本では省略されるが、その末尾に、「又しても『苦の世界』である、だから、これから未だつゞくのである。」とある。さらに、単行本『迷へる魂』の「其三」にあたる初出「ある年の瀬」(「大観」大正10年1月1日発行)にも、その末尾に「(「苦の世界」の内)」と記載されている。つまり、宇野浩二は、『迷へる魂』収録作品を、その執筆当初から、『苦の世界』の物語の一部分として執筆していた

のである。また、この『迷へる魂』に収録される作品等を書く前に出版された、つまり『苦の世界』の最初の本である、大正九年五月二十日に発行された『苦の世界』においても、その扉に「苦の世界（第一部）」と明記していた。

要するに、最初の単行本『苦の世界』を出版する時において、宇野浩二は、『苦の世界』を完結したものとして、意識せず、その続篇『第二部』を想定していたようだ。

では、なぜ『迷へる魂』を『苦の世界』の第二部として出版しなかったのだろうか。単行本『迷へる魂』には、どこを見ても、『苦の世界』の続篇とか、『苦の世界』第二部という記載はなく、『苦の世界』とは独立した、別個の単行本の形態をとって発行された。『苦の世界』第一部は聚英閣、『迷へる魂』は金星堂と出版社が異なることも一因ではあるが、根本的には、『苦の世界』のをんなのモデルである、伊澤きみ子の死に、起因していると思われる。そのことを述べる前に、中篇『苦の世界』（大正9年5月20日発行、聚英閣）の内容について書いてみる。

売れない画家である「私」は、芸者家から逃げてきたをんなと母の三人で暮らすことになる。正式に身請けしたわけでは、勿論ないので、追手を逃れて偽名で、六畳一間での間借りの日々である。「私」は、画をかくこともできず、勤め先をみつめて生活が始まっ

た。平常は、はにかみ屋で、可憐でかわいい女が、一旦ヒステリイを起こすと、手がつけられなくなる。六畳一間の狭い空間での生活、経済的にも逼迫した状態、それらがヒステリイの誘因となり、私のはっきりしない態度と、周りの者のおどとした態度に、加速度的にヒステリイの症状が、回数も程度も増してくる。

HolidayもHell-dayとなり、家にもいられないから、銭湯に出かけ、そこで昼寝をしながら、酒飲み男と友達になり、首吊り男の話を聞く。やっと自分らしさを取り戻せる場がみつかったかと思えるが、銭湯にまでをんなが顔を現わし、それも難しいことのようになる。母親も、とうとう家出するという、最悪の状況になった。

勤め先の出版社の山本も、母親のヒステリイに悩まされており、四十一歳の今も独身であった。出版社が倒産し、失職する、「私」は何とかして、をんなと別れようと画策する。をんなは、自ら再び芸者になると言い、横浜の芸者家に落ち着き先が決定し、やっと別れて行く。

一方、下宿近くの法学士鶴丸も、芸者朝顔をめぐって、父親と恋敵の状態になる。

いろんな問題をかかえた三人が、一日中、花屋敷で遊んだ。帰宅した「私」のもとに、をんなはわずか一日で舞い戻り、一騒動が起こる。やっとのことで、をんなを芸者家へ帰すことで落着くが、ま

だまだ『苦の世界』は続くのである。

「私」とヒステリイの女を軸に、周りの人々の息詰まりそうな『苦の世界』であるが、宇野浩二は、それを独特の饒舌体の文体で飄々と語りかけている。近世文学の戯作風なスタイルを駆使し、大阪人特有の逞しさとうらはらの物悲しさが漂っている。中篇『苦の世界』は、これはこれとして、内容においてまとまりのある作品を成している。

しかし、中篇『苦の世界』は、一日で舞い戻るような、唐突で、何をしでかすかしかないをんなと、「私」のその後は？ また、偽名で暮らす二人の「狭い東京の一室」から、「横浜と東京」へと広がったエリアの中で二人の話と、それを取り巻く人々とは？ と、

その続篇を期待させる設定であり、この登場人物がその後どうなるのか、と読者の興味を惹起させる。宇野浩二自身も、意欲を持って次から次へと書き進めていくつもりであったに違いない。このことは、宇野浩二が中篇『苦の世界』の最終章にあたる部分の、初出「筋のない小説（接前）―続『苦の世界』―」（『解放』大正9年2月1日発行）の末尾に付した作者付記で、「多分作者はこの後篇をつづけて書くつもりではある」といい、「もう一度続篇をつづけて書けば、何とか小説らしくきまりがつきさうに思ふ」と記していることから推察できる。また、同時に、「話手梅野のその後は、そし

てをんなは、問題の中心である彼女が又如何に屢々梅野を悩ますか」と、その続篇の内容を予告している。そして、ここで注意したいことは、中篇『苦の世界』の中心が「をんな」であることを、明確にしていることである。

宇野浩二は、『苦の世界』の続篇において、私と「問題の中心である」をんなを骨子に、それを取り巻く人々の、その後を書こうという意図をもっていたことが明らかであった、といえる。

しかし、ちょうどその頃、をんなのモデルである、伊澤きみ子が自殺してしまふのである。西橋茂樹「伊澤きみ子の死についての一報告―宇野浩二『苦の世界』のモデル―」（『語文』平成3年12月5日発行）によると、伊澤きみ子が死亡したのは、大正八年八月七日であった。しかし、宇野浩二が、伊澤きみ子の死を知ったのは、きみ子が自殺した直後ではなかったようである。初出「人の身の上」（『雄弁』大正9年7月1日発行）の「はしがき」に、きみ子が死んでから「約三か月後の或日のこと、そのことを彼の友達から報告されて知ったやうな次第なのである」とあるが、伊澤きみ子の死を扱った、「人心」（『中央公論』大正9年1月1日発行）や「統軍港行進曲」（『中央公論』昭和2年4月1日発行）も、宇野浩二は、友人広津和郎と思われる人間から、きみ子が死亡して、約三ヶ月後に、その自殺の事実を知らされたと描いている。

さきの「筋のない小説」は、「一月号の雑誌編輯の都合上、切断」され、大正九年一月と、二月に分けて発表されたものである。二月号の末尾に付された作者付記には、「全部昨年の十一月に完成して、大鑑閣に送つてあつた」とあるので、「筋のない小説」は、大正八年十一月には、脱稿されていたようだ。また、「苦の世界」〔解放〕大正八年九月一日発行の末尾には、なんとかうまく騙してをんなと別れた「私」が、山本・鶴丸と三人で連れ出つて花屋敷へ遊びに行つて帰つてきた次の日、をんなが突然帰つてくることなどや、「筋のない小説」の内容の、ほぼ全てを、予告している。すなわち、初出「苦の世界」を書きあげた、大正八年九月には、「筋のない小説」の内容は、既に、宇野浩二の胸中にあり、大正八年十一月迄に、その内容を作品化したということになる。とすれば、「筋のない小説」は、発表時期は、きみ子の死を題材にした「人心」と同年同月の、大正九年一月、またその翌月であるが、宇野浩二が、きみ子の自殺の事実を知る前に書かれたものといえる。つまり、中篇「苦の世界」の部分は、全て、宇野浩二が、きみ子の死を知らないままで執筆したのであった。

宇野浩二は、生活費をえるために、田丸勝之助の匿名で大正五年四月二十七日に「誰にも出来る株式相場」を、古本店主加藤好造のはじめた蜻蛉館書店から刊行した。蠣殻町の銘酒屋にいた伊澤きみ

子を宇野浩二が知つたのはこの頃である。伊澤きみ子は、当時警視總監をつとめ、のち台湾総督となつた伊澤多喜男の姪にあたる。間もなく二人は同棲し、西片町の家に母と三人で暮すことになった。渋川驍の「年譜」〔注13〕によると、大正五年十月、伯父の正朔が危篤に陥つたので、宇野浩二の母は、その看病のため大阪におもむいた。その留守に西片町の家をたんで、中渋谷九百七十番地の竹屋「竹種」の貸間に移つたのである。そのとき、宇野浩二は「水上潔」の仮名を使った。宇野浩二は、翌年四月に蜻蛉館書店の編集者となり、「処女文壇」を編集したが、「処女文壇」は第五号で廃刊となる。そこで生活はいよいよ苦しく、「ついに年末、きみ子と別れて、家を解散し、神田錦町の下宿錦水館」に移つた。中篇「苦の世界」は、そのきみ子との経緯を描いた物語であつて、きみ子が死亡するという、突発的な事件のない限り、「苦の世界」は、をんなを中心とした話として、まだまだ続いていたいと思える。しかし、實在の、伊澤きみ子が自殺したことで、私とをんな中心の「苦の世界」の構想が、根底から崩れてしまつたのである。今迄は、をんなの惹き起こす数々の思いもよらぬ出来事を、膨らませたり、誇張してみたりすれば、「苦の世界」は成立した。だが、「人心」〔中央公論〕大正九年一月一日発行の中で、広津和郎と目される人物「東」が、きみ子の死を伝えて、「君、君の『苦の世界』は到頭本当の悲劇に

終ったよ」という。實在の、伊澤きみ子の死をもって、「苦の世界」のをんな中心の物語は終了したのであった。宇野浩二自身も、をんな中心の『苦の世界』の最初の構想を、改めねばならない必然性にせまられた。

そこで、次の、初出「迷へる魂」（『中央公論』大正9年4月1日発行）では、主人公に、半田六郎という新しい人物を登場させたのである。「迷へる魂」の内容を簡単に説明すると、次の通りである。

やっこの思いで、困り者のヒステリイをんなとは別れたが、下宿屋の勘定書におびえる日々だった。「私」は仕事を求め、偶然出会った半田六郎のすすめに従い、津田沼まで出かける。半田や、芸者上がりの夫人に、ヒステリイをんなの話をするが、夫人はたいそうその話に興味を示す。知らない土地の、慣れぬ家で過ごした一日を思い、半田の案内で海の向うのをんなのいる某町方面を眺めていると、ヒステリイをんなのありし日の、さ迷う姿が走馬灯のように浮かんでは消え、思わず涙を流す場面が描かれている。それから三日間、津田沼滞在中に、「私」は彼等に、浜の真砂と尽きぬヒステリイをんなの話を続けるのである。

この、「迷へる魂」の中では、半田六郎夫妻と、「私」とヒステリイをんなの、どちらの方にウエイトがあるか判らぬ位に、混在した描き方をしている。すなわち、「迷へる魂」では、をんなを中心に

描くというスタイルを、百八十度変更させてはいないのであった。

完全に、をんな中心の『苦の世界』の物語を変貌させたのは、「人の身の上」（『雄弁』大正9年7月1日発行）からであった。「人の身の上」の「はしがき」では、宇野浩二は、「物語の中心人物であつた」をんなが、突然死亡し、「彼の周囲の状態も、人々も、つまり彼の境遇はけろりと変つてしまつた」と述べ、「苦の世界」『筋のない小説』「迷へる魂」（それ等の外篇として「人心」とつづいて来たこの物語を、出来れば少し話し方を変へて、読者諸君に目見えようと決心した次第である。）（傍点増田）と記している。

「話し方を変へて」ということで、これ迄をんなを中心に描いてきた『苦の世界』を、方向転換し、「迷へる魂」の主人公の半田六郎を、これから続く『苦の世界』の、大きな柱に据えたのである。ここで、注目したいのは、雑誌初出発表の「迷へる魂」についての、芥川龍之介の批評である。芥川龍之介は、「四月の月評四」（『東京日日新聞』大正9年4月13日発行）において、「宇野浩二氏の『迷へる魂』（『中央公論』は、例に依つて達者なものである、「二」「三」よりは「三」「四」の方が好い。「三」だけでも短篇が一つ出来さうな気がする」と、「迷へる魂」の「三」と「四」を賞賛したのである。

芥川の褒めた「三」と「四」は、半田夫妻の住む津田沼での場面

である。すなわち、芥川は、「私」とをんなを舞台にした「二三」の「東京」ではなく、半田六郎を中心とする「津田沼」の部分で「好い」と評した。とりわけ、「二三」だけでも短篇が一つ出来さうな気がする」と、「二三」を評価したのである。「二三」は、半田の細君を、かなりクローズアップしている場面である。

宇野浩二は、のち、芥川龍之介について回想するとき、この「迷へる魂」を、芥川龍之介が「ひどく激賞したこと」について、たびたび言及している。宇野浩二にとっては、忘れられない批評の一つであったであろう。

宇野浩二は、この、芥川の批評がきっかけとなったのか、次の「人の身の上」(「雄弁」大正9年7月1日発行)の「はしがき」では、「迷へる魂」に於いて、半田六郎に就いて極く僅しか語らなかつた(中略)そこで、作者はこの長物語のこの最後の篇に於いて、彼の少々詳しい人となりと共に、現在の「私」といふ人物の立場から、今は昔のこの物語に現はれた人々を回想するといふ工夫にして(中略)長々しいこの物語を終らうと思ふのである」と記している。要するに、芥川龍之介の、「二三」だけでも短篇が一つ出来さうな気がする」の指摘に示唆され、「人の身の上」では、勿論、津田沼を舞台に、半田六郎を主人公に、詳細に描くのである。顔つきから性格まで、半田六郎の「詳しい人となり」が表現される。

また、宇野浩二は、「人の身の上」の「はしがき」で、この「人の身の上」を、「長物語の最後の篇」と書き、この「長々しいこの物語を終らうと思ふのである」と述べている。が、「今は昔のこの物語に現はれた人々を回想するといふ工夫」が「人の身の上」では十分になされたといひかねたのであろうか。つまり、「この物語に現はれた人々」といいながら、この「人の身の上」では、桂庵の里見しか描かれてなかつた。そこで、桂庵の里見以外の人々を、「作り話」(「雄弁」大正9年9月1日発行)や「ある年の瀬」(「大観」大正10年1月1日発行)で書き進めていく。「ある年の瀬」では、木戸参三や山本長兵衛を、「作り話」では、主に山本長兵衛を登場させるのである。

要するに、「人の身の上」「ある年の瀬」「作り話」は、半田六郎を中心として「現在の『私』といふ人物の立場」から、今迄登場した「人々を回想する」ことが試みられる。

さて、このように見ていくと、伊澤きみ子の死を宇野浩二が知る以前の、中篇「苦の世界」と、それを知った後で描いた「迷へる魂」「人の身の上」、「ある年の瀬」、「作り話」では、明らかに中心人物も、宇野浩二の書く姿勢も、異なってくるのである。そこで、宇野浩二は、「苦の世界」第二部などとはせず、「迷へる魂」という、「苦の世界」とは別の書名で、出版することにしたのではなからう

か。

ところで、大正期まで中篇小説であった『苦の世界』が、長篇小説へと変化していくのは、昭和七年の、『苦の世界（改造文庫）』（昭和七年十一月十一日発行、改造社）からである。この改造文庫版は、「その一」から「その四」までで構成されている。「その一」「その二」は、中篇『苦の世界』での部分であり、「その三」「その四」は、『迷へる魂』（大正十年十一月二十日発行、金星堂）の部分、組み入れたものである。昭和七年に、これまで、中篇小説として位置していた『苦の世界』を、「その三」「その四」を増補し、長篇小説へと変貌させていくのは興味深い。宇野浩二にとって、昭和七年とはいかなる年であったのか。

洪川驍は、前述の「年譜」の「昭和七年」の項では、次のように記している。

十二月九日、四年間の休止期間をへて、小出楯重をモデルとした本格的な復活第一作「枯木のある風景」を、当時、『改造』の記者をしていた上林曉に渡した。五年間にわたる上林の督促の結果であった。

宇野浩二は、病氣療養中、作家活動を停止していた。その宇野浩二が、昭和八年一月に、『枯木のある風景』を「改造」に発表し、華々しく文壇に復帰する。その時期のことを、宇野浩二は、のち、

『枯木のある風景・枯野の夢（岩波文庫）』（昭和二十九年九月五日発行、岩波書店）の「あとがき」で、次のように回想している。

私は、昭和三年に大病をしたので、それから三四年の間、小説を書くことから遠ざかった、といふより、小説が書けなかった。しかし、書けないながらも、こんどはこれまでのと違つたものを書きたいといふ氣もちが心の底にあつたのか、いつからとなく、（いや、昭和六年の初め頃から、）小出楯重のことを書いてみよう、と思ひ立つた。（中略）小出の画集を側において、少しづつ書きはじめた。それが昭和七年の六月上旬であつた。ところが、初めの十六枚ぐらゐを書く、そこでバッタリ行きづまつてしまつて、その十六枚を書き直し書き直するうちに、三箇月ほど立つた。（傍点増田）

宇野浩二は、昭和七年六月上旬頃、「これまでのと違つたものを書きたいといふ氣もち」で、『枯木のある風景』を起稿しはじめ、リアリズムの文学へ向かつたのである。「これまでのと違つたもの」という、「これまでの」ものとは、宇野浩二の意識に、『苦の世界』や『蔵の中』などに代表される初期の饒舌体の作風が、あつたであろう。「これまでのと違つたもの」を書くことによって、作家として文壇に再起をかけていた。ちょうど同じ時期に、『苦の世界』の中篇から長篇への改篇を試みたのである。

日本近代文学館に所蔵されている宇野浩二の「日記」を見ると、「昭和七年八月十一日(木)」のところに、「改造社出版部の对上敦君来訪。『苦の世界』三部を一つにまとめて『改造文庫』出版する事となる」とある。

しかし、昭和七年の改造文庫版では「苦の世界」は、現行の「その四」までしか、収録されなかった。現行の「その六」までは、既到大正十年までに執筆され、発表されていたのに、改造文庫版では、「その一」―「その四」までしか収録しなかった。それはなぜであったか。

宇野浩二は、「僕の作品に就て文学に志す若き人々へ」(新潮)昭和三年十月一日発行)で、「この『さ迷へる魂』と題する『苦の世界』の第三編は、僕の愛する作の一つである。その題で、以前本を出したが、余り知る人はいないだらう。僕は『苦の世界』を纏めて、『上中下』として出版したいと思つてゐる。」と述べている。

宇野浩二がここである『さ迷へる魂』とは、初出「迷へる魂」(中央公論)大正九年四月一日発行)をさす。宇野浩二は、昭和三年になつても、「迷へる魂」を、『苦の世界』の第三篇とみなして、『苦の世界』を纏めて『上中下』として出版したいと考えていた。すなわち、「上」は、「苦の世界その一」の部分であり、「中」は「苦の世界その二」の部分である。そして「下」は、初出「迷へる

魂」と「人の身の上」との部分であらう。「人の身の上」の「はしがき」で、「この長物語のこの最後の篇に於いて、(中略)この物語を終らうと思ふのである」と述べている。つまり、昭和七年の改造文庫版の『苦の世界』は、「人の身の上」で『苦の世界』を終らうという意図と、昭和三年に、「上中下」として出版したいと考えたことに基ついて、発刊したのであらう。

しかし、『苦の世界』は不思議な作品である。「上中下」という形の昭和七年の改造文庫版にも、宇野浩二は満足できなかったようだ。戦後になつて、『苦の世界』はまた一変するのである。昭和二十四年に『苦の世界』(昭和二十四年十二月二十三日発行、文芸春秋新社)でその五「ある年の瀬」、その六「ことごとく作り話」を収録し、現行の形に整えた。

このように、伊澤きみ子の死亡によつて、途中で、をんなから、半田六郎へと、『苦の世界』の中心人物が変わつたり、そして、現行『苦の世界』が成立するのに、ずいぶん時間が経過した。現行の『苦の世界』は、その一・その二がをんなを中心に、その三がをんなと半田六郎を中心に、その四・その六は、半田六郎中心とするというように、それぞれ、異なる描き方のものが組み合わさっている。そこで、長篇『苦の世界』を通読してみると、一見、全体としての有機的なつながりが希薄で、まとまりがないように見受けられ

る。言いかえると、前半部（その一・その二）と後半部の間に、かなりの断層を感じ、それが、どこまでいっても完全に埋め尽くされたとはいえないのである。

〈注〉

- (1) 「あとがき」〔蔵の中〈改造文庫〉〕昭和14年8月16日発行、改造社)

- (2) 「千里山文学論集」平成5年3月20日発行、第49号、関西大学大学院

- (3) 「四月の文壇」〔東京日日新聞〕大正8年4月3日)

- (4) 「読売新聞」大正8年4月3日

- (5) 「文章世界」大正8年5月1日、第14巻5号

- (6) 「太陽」大正8年5月1日、第25巻5号

- (7) 「雑誌月評」〔読売新聞〕大正8年8月7日、8日)

- (8) 「文芸時評」〔批評〕大正8年10月1日、第8号)

- (9) 「九月文壇の印象」〔早稲田文学〕大正8年10月1日、第167号)

- (10) 「苦の世界」と『妖婆』〈創作月旦(3)〉〔新潮〕大正8年10月1日、第31巻4号)

- (11) 本田康雄「滑稽本」〔日本古典文学史の基礎知識〕昭和50年2月25日発行、有斐閣)

- (12) 中野三敏「戯作の世界」〔同右〕

(13) 『宇野浩二論』昭和49年8月30日発行、中央公論社